

鶴ヶ島市において、地域の当事者、ボランティア団体、施設等が主体となつて取り組まれた福祉教育プログラムについて、サービスラーニングの視点を用いて整理したものを掲載しました。これから、さらに、ブラッシュアップを考えています。学校や地域が一体となり、地域づくりと人づくりに取り組んでいくためのツールとなれば幸いです。

学校で整備している福祉教育関係備品についても掲載しています。ぜひ、活用してください。

## 鶴ヶ島

令和元年7月 [第2版]

# 福祉教育プログラム 福祉教育関係備品

社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会



# 目次

サービスラーニングを取り入れた福祉教育実践 ..... 1 ページ

福祉教育プログラム集 ..... 15 ページ

1. 手話体験プログラム～聴覚障害を理解するために～ ..... 17 ページ  
鶴ヶ島市聴力障害者会・鶴ヶ島市手話通訳問題研究会「折鶴会」
2. 視覚障害と共生社会の理解プログラム ..... 19 ページ  
鶴ヶ島視覚障がい者の会アイネット：長岡 保
3. 伝える・伝わる知的障害疑似体験  
～自分の生活に引き付けるコミュニケーションの気づき～ ..... 22 ページ  
知的障害を理解しよう！DEN&DEN：中里 由架利
4. 高齢者理解プログラム～自分でできることを考えて実践する～ ..... 25 ページ  
鶴ヶ島市福祉教育・ボランティア学習推進員 ういず・共に：木口 真理子
5. サービスラーニングの視点を用いた車いす体験プログラム ..... 27 ページ  
鶴ヶ島市福祉教育・ボランティア学習推進員 ういず・共に：木口 真理子
6. 主体的に考え、ふだんの生活に活かすHUG(避難所運営ゲーム)プログラム ..... 30 ページ  
鶴ヶ島市福祉教育・ボランティア学習推進員 ういず・共に：木口 真理子
7. 「いのち」の授業」学習プログラム～小さくあたたかい命に触れ「いのち」を感じる ..... 33 ページ  
Baby-smile：倉持 尚美
8. 子ども達と入居者にとって新たな気づきが生まれる交流  
～小学生と高齢者のふれあいプログラム～ ..... 36 ページ  
特別養護老人ホームみどりの風：嶋野 博之
9. 多感な中学生の心を揺らす職場体験 ..... 39 ページ  
介護老人保健施設 鶴ヶ島ケアホーム：小池 真由美
10. 1 尊厳と社会連帯の意識を高める教員養成のための「介護等体験」 ..... 42 ページ  
介護老人保健施設 鶴ヶ島ケアホーム：小池 真由美
11. 認知症の方々の交流により、自分たちのできることを考えるプログラム実践 ..... 45 ページ  
あったかホーム：加藤 拓・小森 真弓
12. 自分のまちを良くする仕組み共同募金運動を学びながら、  
自分たちの役割を知るプログラム実践 ..... 48 ページ  
埼玉県共同募金会鶴ヶ島支会



# サービスラーニングを取り入れた 福祉教育実践



平成30年度福祉教育推進者研修（埼玉県社会福祉協議会主催）  
（2019年3月18日） 資料より抜粋

# サービスラーニングを 取り入れた 福祉教育実践 ～地域の力をどういかすか～

鶴ヶ島市社会福祉協議会

## 福祉教育とは何か？

社会福祉の理解と関心を深め、ともに手を携えて生きていく力、福祉課題を解決していく実践力を身につけ、人間としての成長を図る。

学校外における福祉教育のあり方と推進」全社協・全国ボランティア活動振興センター  
1983年9月より

### 地域福祉の主体形成

ふだんのくらしのしあわせ

地域福祉は福祉教育にはじまり、  
福祉教育に終わる

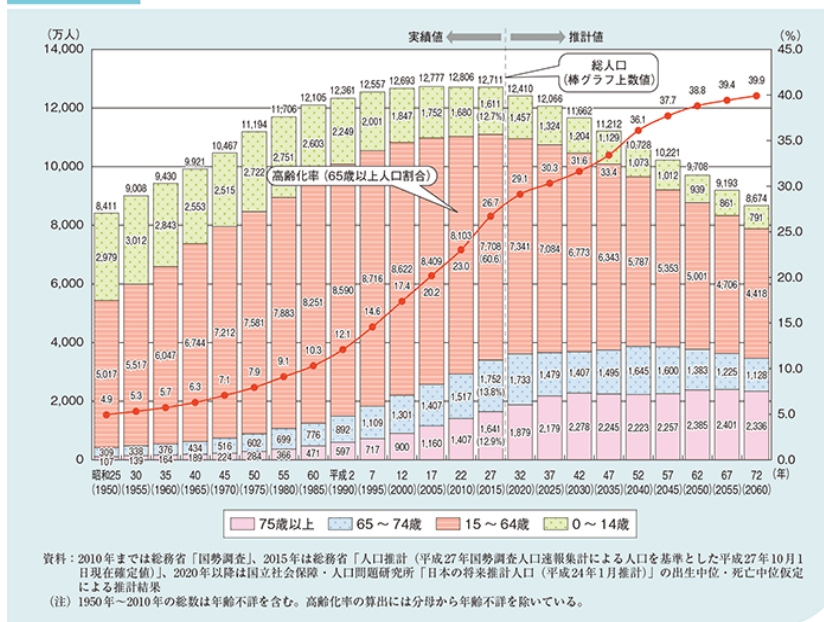
# 時代の流れとその必要性 ＜福祉＞

## 我が事・丸ごと地域共生実現本部

厚労省平成28年7月15日

福祉教育の「共に生きる力」主体形成

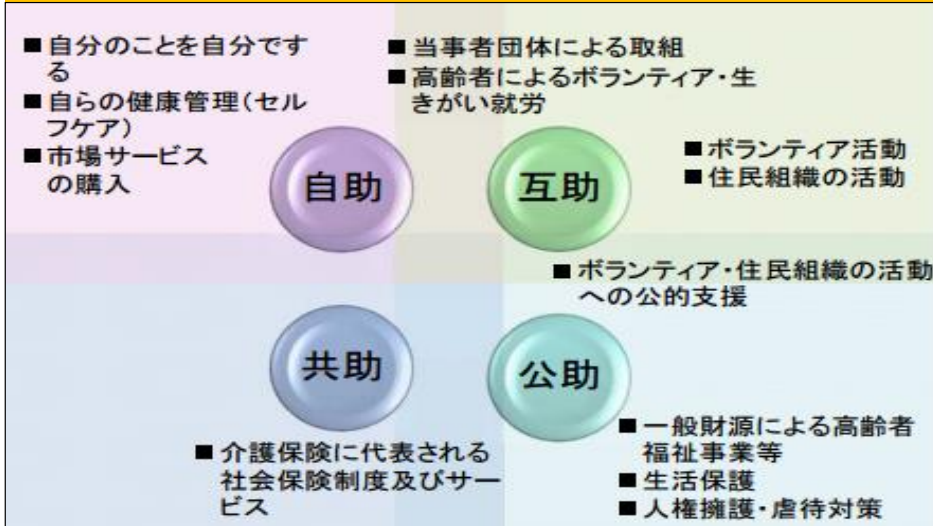
図1-1-4 高齢化の推移と将来推計





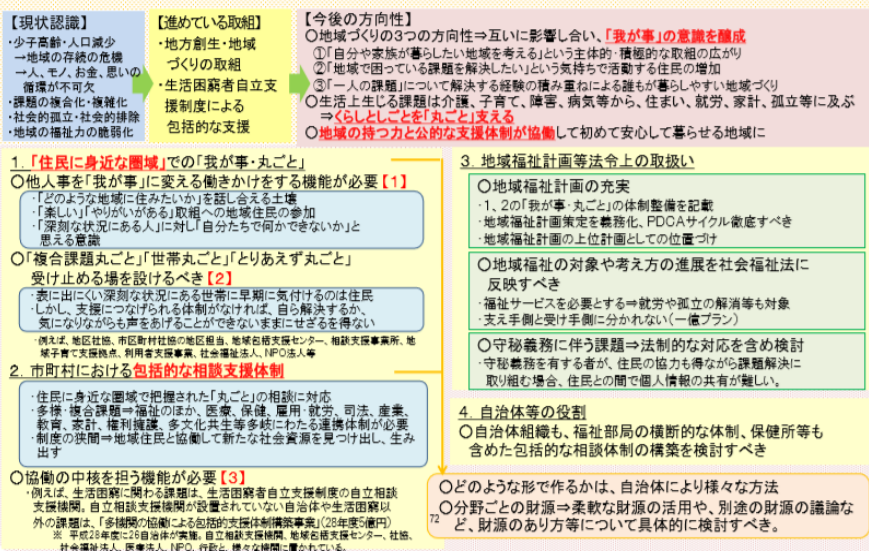
# 自助・互助・共助・公助と 地域包括ケアシステム

地域包括ケア研究会報告書(H25.3)

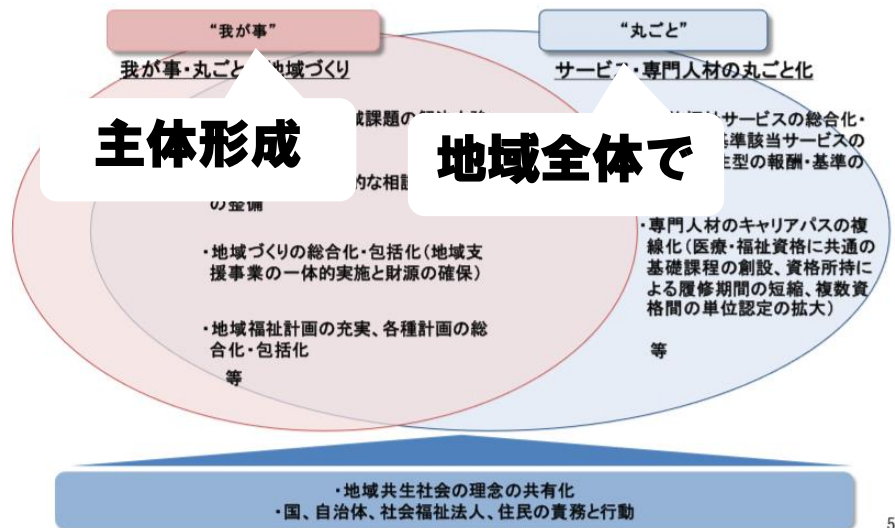


## 「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部 資料

### 地域力強化検討会中間とりまとめ(平成28年12月26日)の概要 ～従来の福祉の地平を超えた、次のステージへ～



## 「地域共生社会」実現の全体像イメージ(たたき台)



## 時代の流れとその必要性 ＜教育＞

「開かれた学校」から  
「地域とともにある学校」への転換  
対話的で主体的な深いまなび

新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策  
について(答申)(中教審186号)平成27年12月21日

能動的な学びから主体的な学びへ

福祉教育の「共に生きる力」主体形成

## 学校と地域の連携・協働の必要性

子どもたちの豊かな学びと成長を保障する場としての役割のみならず、地域コミュニティの拠点として、**地域の将来の担い手となる人材を育成する役割**

## 地域とともにある学校への転換

「開かれた学校」から更に一步踏み出し、地域でどのような子供たちを育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域住民等と共有し、地域と一体となって子供たちを育む「**地域とともにある学校**」へ

## 子どもも大人も学び合い育ち合う

地域とともにある学校の運営に備えるべき機能として「**熟議**」「**協働**」「**マネジメント**」  
子どもの育ちを軸に据えながら、**住民自らが学習し、地域における教育の当事者としての意識・行動を喚起していくことで大人同士の絆きずなが深まり、学びも一層深まっていく。**

## 福祉教育プログラム改革

### 福祉教育実践の形骸化からの脱却

貧困的な福祉観の再生産

### ○サービ斯拉ーニングと

### 地域づくりの提案

→ 地域課題の解決、地域ニーズへの対応  
協同実践の展開、リフレクションの重視

## 「福祉教育」の課題

○福祉教育＝疑似体験が目的になっているのではないか？

○知識学習に止まっているのではないか？

(例) 高齢者、障害者は大変だ。

⇒ 貧困的な福祉観の再生産



○生き方の学習になっていないのではないか？

(例) 障害理解はできても、いじめはやめない。

○行動の意欲を育てていないのではないか？

(例) 障害者や高齢者の生きづらさを理解できても、自分たちが何をすれば役に立てるのかを体験する機会がない。

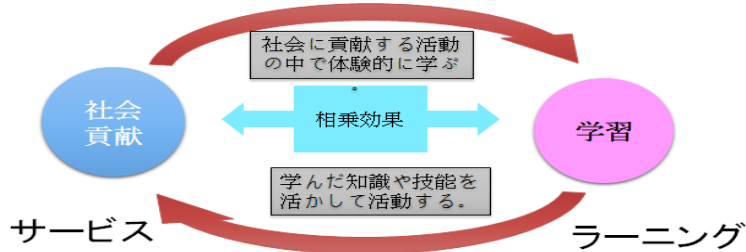
○現実の自分の生活とかけ離れているのではないか？

## サービスラーニングを提案する背景

- ・ 従来の福祉教育のプログラムは、対象者理解や援助技術の習得、生徒たちのやさしさやおもいやりといった感情形成に重きがおかれ、「**地域**」にまで目が向けられなかった。自分たちが住んでいる**地域への関心を促し、地域にある課題に気づき、その解決にむけて何か動いてみることによる過程**を通しての学びが必要である。

# サービスラーニングの定義

- ・ 学習活動と社会貢献活動を意図的、計画的に結びつけ相乗効果を生む教育プログラム

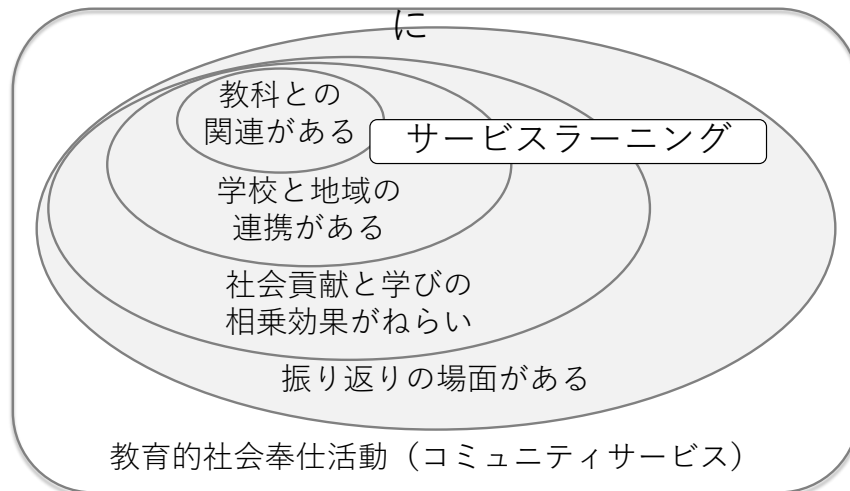


- ・ 教育活動の一環として、一定の期間、**地域のニーズ**等を踏まえた**社会貢献活動を体験すること**によって、それまで知識として学んできたことを実際の地域社会の課題解決のための活動に活かし、また**実際の社会貢献活動の体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野、成長を得る**教育プログラム。

13

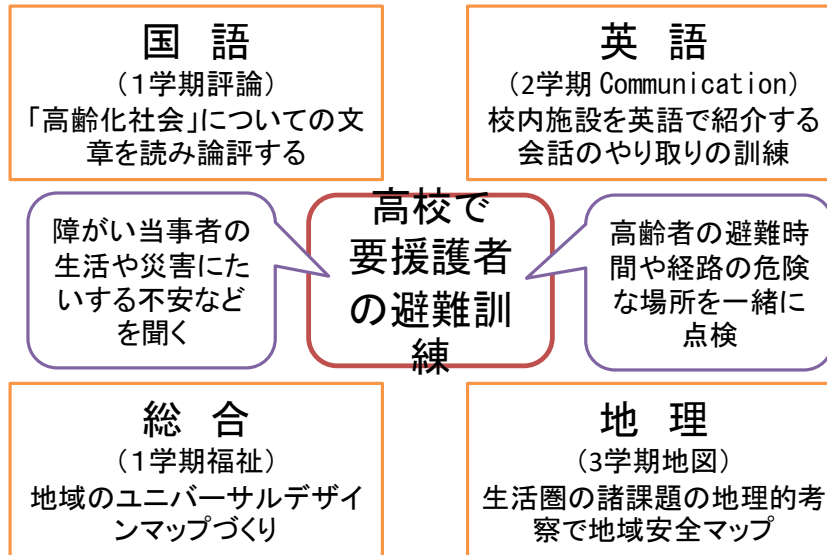
## サービスラーニングの定義の幅

「市民としての責任意識をはぐくむ」ために

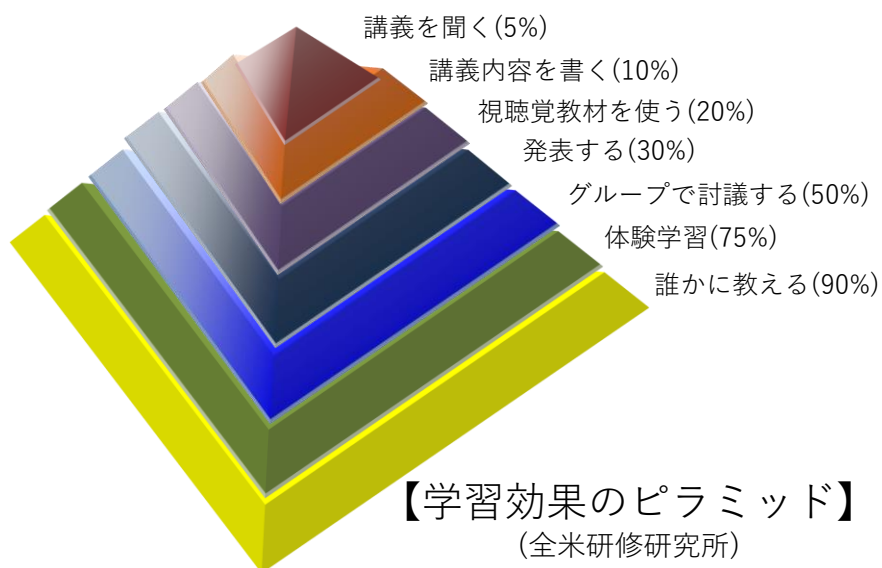


※National and Community Service Trust Act 1993の定義から

## 複数教科学習との関連づけによる 福祉教育の展開の案



## サービスラーニングの理論的背景



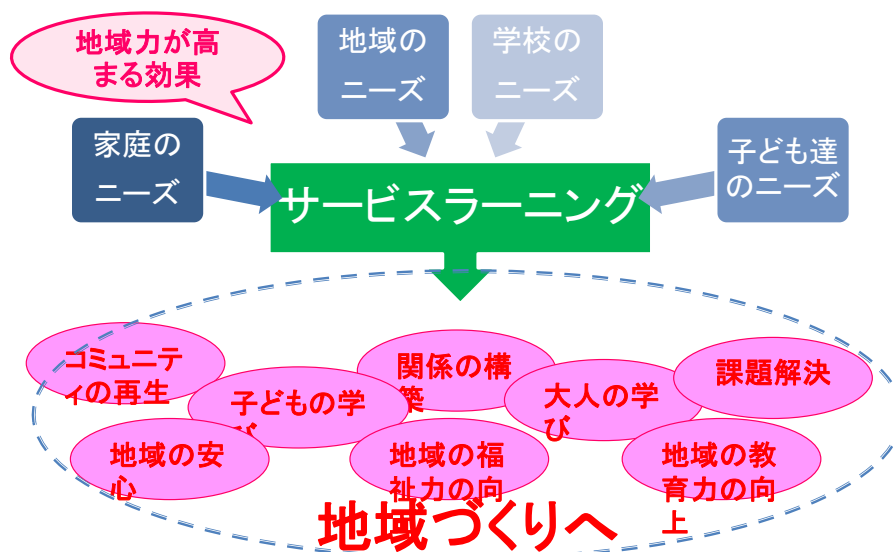
## 実践のための8つの要素

- ① 地域のニーズの把握
- ② 学習目標の設定
- ③ 学習者自身の声と計画づくり
- ④ 事前の準備と研修
- ⑤ 意義ある活動の保障
- ⑥ リフレクション
- ⑦ 評価
- ⑧ 祝福と認知



Points of Light Foundationの  
「Critical Elements of Service-Learning」

## サービスラーニングと地域づくり





# 鶴ヶ島市社会福祉協議会 サービスラーニングの取り組み

2017年度～

今の実践を大切にしながら

全社協サービスラーニングモデル事業

○福祉教育・ボランティア学習研修

○福祉教育・体験学習推進校等指定事業

【小学校8校、中学校3校】

【当事者】【ボランティア団体】【施設】

それぞれの中で  
サービスラーニングの視点でプログラム作り

## 学校・社協・地域のプラットフォームで 地域づくりへ



青少年健全育成協議会と学校と社協  
中学生 78名 地域の大人45名



地域の方々へ感謝の会

社協



文化祭で  
認知症サポーター養成講座  
実際に高齢者との交流

学校

地域



## 高齢者・施設交流 サービスラーニング展開例



## 共同募金・募金活動 サービスラーニング展開例



## 市民が地域にかかわり学びあう意義

- 地域の問題を解決する力が高まる
- 相互理解が深まる
- 地域内の社会関係が豊かになる
- 担い手の自己肯定感が高まる

生活支援コーディネーター養成講座資料より

## 人が育ち、関係性の構築 相互実現型の支え合いの実現

相互実現的自立 interdependent  
ケアリングコミュニティ

「支える、支えられる」という一方的な関係ではなく、「相互に支え合う」地域を構築する。

## 社協の役割は・・・



## ● 地域づくりのための 福祉教育

- 多様な主体への働きかけ
- 実践者の学び合いの場づくり
- サービスラーニングの視点

「地域」から体験的に学ぶ  
人間関係の再構築  
主体形成

・生き様がわかる  
・身近な人  
・支えてもらった

人生にはたくさんの分岐点がある。  
どの道を選ぶのか。

その出会いによって人生は大きく変わる。

# 福祉教育プログラム集



# 手話体験プログラム ～聴覚障害を理解するために～

鶴ヶ島市聴力障害者会・鶴ヶ島市手話通訳問題研究会「折鶴会」

## 1. 背景と目的

市内各学校の手話体験講座は、回数に違いがあるが殆どの学校で実施されている。足に障害のある人は車椅子を使用し、視覚障害者は白杖を使用しているなど、それぞれ見て障害者だと分かるが、聴覚障害者は外見上では判断がつきにくく「見えない障害」と言われている。このように、聴覚障害は他の障害と比べ判りにくいことを児童、生徒に理解してもらい、日常生活での不便さへの理解と共に出会った時に何ができるかを考えてもらい、実行できることを目的としている。

## 2. 本プログラムの目的

- (1) バリアフリー社会と言われている中で、心のバリアをなくし気持ちが通じ合えることの大切さを知る
- (2) 「聞こえない」という障害について知る  
外見だけでは判らない（判りにくい）障害
- (3) 聴覚障害の詳細について知る（先天ろう、難聴、中途失聴）
- (4) 聴覚障害者のコミュニケーション方法を知る（身振り、空文字、筆談、手話など）
- (5) 身近かで簡単な手話を知る

## 3. プログラムの概要(流れ)

- (1) ろう者当てクイズ：ろう者は見ただけでは分からないことを理解してもらい講師、アシスタントが会話をせずに児童の前に並び、聴覚障害者を当ててもらい
- (2) 自己紹介
- (3) 聴覚障害の種類：聴覚障害と言ってもみんな同じではない（生まれた時から聴こえない、途中で聞こえなくなった、少しは聞こえる…など）ことを理解してもらい
- (4) コミュニケーション方法：手話だけでなく、身振り・指文字や空書・筆談などがある事を知り、出会った時には、自分にできる方法でコミュニケーションを取るよう説明



- (5) 口話ゲーム：日本語には口形が同じ単語があり、口話だけでは伝わらないことを理解してもらう。  
 声を出さずに口形のみで、単語の判断（「卵とたばこ」「1」「7」）ができるかの体験。  
 この時に、手話をつけると通じやすいことを理解してもらう。
- (6) 当事者の生き立ち、ろう教育などの話を聞く：生活の中の不便、そのことへの工夫を知るとともに、ろう教育の状況（手話が禁止されていたことなど）や影響を知る。
- (7) 手話学習：学校でよく使う単語や自分の名前などを手話で覚える  
 部活の単語は生徒がイメージしやすく、表現しやすいので伝える練習になる

#### 4. まとめ(考察)

- ・聞こえない人の話を聞き、手話学習を通してろう者に対する理解を深め、街で出会った時には自分でできる範囲での協力ができるようにする。
- ・バリアフリー社会の中で、建物や施設、設備、道具等の整備だけでなく、心のバリアをなくし気持ちが通じ合えることの大切さを知る。
- ・口話ゲームを通してわかるように口話だけでは限界があり、手話がろう者にとって大切な言語であることを知る。



#### 5. プログラムの提案

##### ＜このプログラムがどのような場面に活用できるか＞

- ・学校だけでなく地域の人にも、手話は言語であることや聴覚障害への理解を深めてほしい。学校の体験学習だけにとどまらず、地域でも実施する働きかけも必要である。
- ・手話であいさつを日常的に行うことを地域の中で提案し、子ども達から広めてもらいたい。

##### ※鶴ヶ島市手話通訳問題研究会「折鶴会」の活動日及び活動内容紹介

1. 昼の部例会 水曜日 午後1時30分から3時30分まで、東市民センター
2. 夜の部例会 木曜日 午後7時30分から9時30分まで、東市民センター
3. 東市民センターまつり、ハートフルマーケット等の行事参加

##### 社協主催事業への協力

1. 手話講習会入門、基礎講座
2. 啓発講座
3. 「彩の国ボランティア体験プログラム」等を開催しています。

# 視覚障害と共生社会の理解プログラム

実践者：鶴ヶ島視覚障がい者の会アイネット：長岡 保

## 1. 背景

---

- (1) 「生活福祉課題を抱えた者と健常者の共生」「福祉教育の重要性」などが、社会や学校教育等の場で求められている。
- (2) 身体などに障害のある方に、声をかけたり、手を貸したりしたいという人は結構多いが、どのようにしたらよいかわからないという声も多く聞かれる。
- (3) これまでの福祉教育では、学校の希望に沿って、ガイド及びアイマスク体験、日常生活用具の説明・展示などに多くの時間を費やしてきたように思われる。
- (4) 最近、単なる講義、体験等で終わるのではなく、考えさせるあるいは意識させて、普段の生活、活動の場で応用・実践してみたいとなるような学習（サービスラーニング）を意識した学習が推奨されている。
- (5) 福祉教育の重要性を感じ、参加してみたい、やってみたいが、やり方が分からないあるいは自信がないという声が多く聞かれる。

## 2. 本プログラムの目的

---

### (1) 本プログラムの位置づけ

アイネット会員等が、ゲストティーチャーとして小学校・中学校の福祉教育を実施する場合の基準とするための基本的なプログラム。

### (2) 本プログラム(教育)の目的

視覚障害体験学習を通じ、①普段の生活の中で、困っているようなあるいは困っているかもしれない人を見かけたら、気軽に声をかけられるような意識を醸成する。②健常者と生活のしづらさを抱えているもの（生活福祉課題を持つ者）との共生社会の理解。（ちょっとした声掛け・手助けがあるととても有難いことを知ってもらう。また、通学路や街中で、段差や障害物などのバリアがあることに気づいてもらう）

③児童・生徒自身に、普段のくらしやすさに気が付き、何かできることを考えてもらう。

## 3. プログラムの概要(流れ)

---

### (1) 紹介と導入（10分以内）

ア. ゲストティーチャーの紹介と当日の流れについて

イ. 本授業中でのお願いなど

（質問、答えなどは、手をあげたりうなずいたりするのではなく、声を出す」「拍手をする」など、音で知らせてほしい旨お願いする。

（児童・生徒の緊張解消と理解度を確認するために、クイズをだして確認してもよい）



例：日本に、盲導犬は何頭くらいいると思いますか？

① 100 頭②約 1000 頭③約 10000 頭⇒拍手で回答を求める。（正解は約 1000 等）

(2) 講義等（視覚障害及び視覚障害者の生活や行動について）（20分）

ア. 全盲と弱視（全く見えない人と見えづらいが若干見える人がいること）

イ. 目が不自由で特に困ること⇒どのようにしているかについて

①文字の読み書きができない。物が探せない。⇒どうしていると思いますか？

（回答原案）

- 聴覚（音声を使っていること）
- 触覚（点字など）
- 見える人に頼む、協力してもらう
- 工夫をする

（上記は、回答するが、あまり詳しく説明せず、児童・生徒さんに疑問や質問、考えてもらうことを作為する）

②自由に移動できない⇒「どうしていると思いますか？」何名かの児童・生徒に答えてもらう。

- サポートしてもらっての移動
- 盲導犬をつかっただけの移動
- 白杖をつかっただけの単独移動

点字ブロックを使って移動している場合に困ること。

方向や場所が分からなくなったりした人を見かけた場合のお願い。

バスや電車で、立っている視覚障がい者を見かけた場合などのお願い。

<休憩>

(3) 声掛け及び誘導體験（30分）

ア. 困っていると思われる人を見かけた場合の声のかけ方を説明し、次にガイドの要領を展示する（10分）

イ. ガイド及びアイマスク体験（20分）

（組み分け、ペアについては、事前打ち合わせ時に、先生にお願いしておく）

- ・ガイド体験とアイマスク体験者を後退で実施する。
- ・移動、体験を含め20分で完了し、当初の位置に集合する。

(4) ふりかえり&まとめ（25分）

今日学んだこと、体験したことを通じて①感じたこと、わかったこと②難しかったこと、わからなかったこと③今後、自分でできること、やってみたいことを記入（5分）⇒グループで話し合い（10分）⇒発表（10分）





#### 4. まとめ(考察)

(実施する際の留意事項について)

- ①言葉での説明は、こと細かに説明せず、児童・生徒が疑問に感じたり、質問をしたくなるような程度にとどめる。(仕掛けを工夫)
- ②質問時間を可能な限り多くとり、児童・生徒に考えてもらう、疑問や聞いてみたいあるいは、質問してみたいという気持ちを抱かせるよう着意する。
- ③自分が何かできる、やってみたいという気持ちを育成する。
- ④児童・生徒が答えた回答や質問には、努めて肯定的に受け止め、発言しやすい雰囲気作りに心がける。
- ⑤本プログラムは、基準の流れ・項目であり、細部内容や言葉等は、担当するゲストティーチャーが、学校との打ち合わせ、自らの生きてきた体験や知識等をもとに、自らの言葉で実施。
- ⑥時間配分、実施項目は、1時間の授業か2時間の授業かによって、考慮して決める。
- ⑦可能であれば、音声時計、携帯電話、ICレコーダ、体温計など、手軽で身近な視覚障害者用生活支援用具などを使って聞かせたり紹介しながらやるのも印象的あるいは関心を持たせるやり方である。



便利グッズの紹介に興味深々

#### 5. プログラムの提案

<プログラムがどこに活用できるか>

- ①学校、中学校の福祉体験授業
- ②市民への福祉啓発講座等

##### 《注意点・課題》

- ①視覚障害当事者のみでは、児童・生徒の反応や行動がつかめないため、晴眼者とともに実施する必要がある。
- ②誘導ガイドにおいては、専門家を育成する目的ではないので、危険な個所、難所は避け、声掛け、基本姿勢等のみにとどめる。(恐怖心を持たせると、ほかの内容が印象に残らなくなる)



視覚障害者便利グッズの紹介

# 伝える・伝わる知的障害疑似体験 ～自分の生活に引き付けるコミュニケーションの気づき～

実践者：知的障害を理解しよう！DEN&DEN 中里由架利

## 1. 背景と目的

学校では、福祉教育が盛んに取り組まれているが、多くの場合、身体障害者関係の体験(点字、手話、車いす)がである。一方で、子ども達は日常的に特別支援学級の子ども達とふれあい、いろんな思いを持っていることを知る。身近な学校で「ガイジ」と障害児のことを総称して差別的に呼んでいる実態を知った時に、私たちも私たちの子どもたちのことをきちんと伝えていかなければならないと感じた。支援してくれる方々にきちんと伝えるフェイスシートの作成と共に、この地域と一緒にいる子どもを含めた人々に理解してもらうために子の活動を行っている。

10年以上前に、知的障害児のことを伝えるために「ピーチクパーチク天国」という伝わらないことがわかる実践を行っている入間市の「クレヨンの会」から、レクチャーを受けて実施し始めた。

私たちの子ども達も、他の人と同じように、感情があり伝えたいことがある。そして、私たちの子ども達も、必ず大人になって暮らしていくときに、どうしたら、お互いに認め合い、暮らしやすい社会が創れるのかを、私たちの子ども達（障害者）と一緒に考えてもらいたいと思っている。

## 2. 本プログラムの目的

- (1)障害がある人(子ども)にも、健常な人と同じよううれしい・悲しい・もどかしい・楽しい腹立たしい・わかってほしい等の感情があることを知る。
- (2)お互いがわかり、適切な対応ができれば、不要な摩擦を生むことなく、分かり合えると気づく。
- (3)「伝えたいことが伝わらない」「何をいっているかわからない」その時の感情を感じる。
- (4)健常だと思っている自分たちにも同じような体験があることに気づく。
- (5)自分たちの日常生活において、どんな態度が大切かを考える。

## 3. プログラムの概要(流れ)

流れ	注意事項など
<p>(1)挨拶 自己紹介</p> <p>(2)導入</p> <p>①図形を口で伝えるワーク ・「まるを2つ書いてください。」とだけ伝える。(右図:2つのまるの多様性)</p>	<p>*時間や人数により、内容を変える。</p> <div style="display: flex; flex-wrap: wrap; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 50px; margin: 5px;">○ ○</div> <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 50px; margin: 5px;">◎</div> <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 50px; margin: 5px;">⊙</div> <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 50px; margin: 5px;">⊖ ⊖</div> <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 50px; margin: 5px;">○ ○</div> <div style="border: 1px solid black; width: 50px; height: 50px; margin: 5px;">丸丸</div> </div> <p>これだけでも、様々な形があることを認識し、聞いただけでは、結果に大きな違いがあることを認識する。</p>

流れ	注意事項など
<p>(2) 導入</p> <p>① 図形を口で伝えるワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図を言葉で説明してもらう(下図)</li> </ul>  <p>↑ 説明が難しい図</p> <p>② 「ピーチクパーチク」で伝えるワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2～3人でグループをつくり、言葉は「ピーチク・パーチク」のみで伝え合う。</li> <li>例)「今食べたいもの」「運動会でよかったこと」等、</li> <li>日常的な会話で伝えたいことを伝えてみる。</li> </ul> <p>(3) 講和</p> <p>「障害児の日常を伝える」</p> <p>「障害児をもつ親の思いを伝える」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【作業所へ行くとき、電車が不通になると対応できない。わからないことがあると戻ってくる。アイドルが好き。ビールを仕事(作業所)のあと飲むのを楽しんでいる。サングラスをかけるのはカッコいいと思いこんでいる。等々】</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(2)のワークの感想をもしかしたら、知的障害のある子たちは、いつも抱えているのではないかと問いかけてみる。</li> </ul> <p>(4) まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人個人で感じたことをまとめる。</li> <li>・お互いに感じたことを確認し合う。</li> <li>・全体で確認し合う。</li> <li>・参加したメンバーから、子ども達の発表に対して、コメントをする。</li> </ul>	<p>目で見たものを言葉で伝えることの難しさを感じる。</p> <p>また、聞いたことを図にする難しさを感じる。</p> <p>*必ず受講生に説明をしてもらう。図については、2～3つは用意し、簡単なものから始める。</p>  <p>・実際に、何度もこのワークを実施しているが、どこでも同じ言葉が返ってくる。</p> <p><b>「伝えたいことが伝えられない」</b></p> <p><b>「何をいっているのかわからない」</b></p> <p>それぞれの様子を伝える。生活のしづらさと共に、興味関心のあることや普通の人と同じところを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・メンバーには、ダウン症、自閉症、発達障害のある子どもの親である。生活の様子を伝えながら、それぞれの特性を伝える。</li> <li>・個別の生活の様子から、得意不得意なこと、できることできないことも伝える。</li> <li>・親としての思いを伝える。</li> </ul> <p>【ちょいネタ】</p> <p>*50歳を過ぎたおばさんがミニスカートをはいていく(決死の覚悟)。最初は違和感があると思うが、最後にこの姿になれたか聞いてみる。</p> <p>⇒一緒に居ることで慣れることもよくあるということを伝える。</p>

#### 4. まとめ(考察)

知的障害疑似体験というのは、一般的にイメージがつかないのではないかと考える。また、「知的障害」と聞いて、イメージすることも人によって大きく違ってくるのではないだろうか。

私たちのグループ名は「DEN（伝える）&DEN（伝える）」を意味している。ポケモンのさとしはピカチュウの発する「ピカ」「チュー」でピカチュウの思いをくみ取っている。また、以前一度「ピーチクパーチク」ワークでお互いの話がわかったと言う子ども達がいた。常に一緒にいる友達であった。

障がいがあってもなくても、お互いに「伝えよう」「わかろう」とする姿勢がとても大切であることを学んでほしいと考えている。また、常に一緒に居ることも大切なことであると考えている。一緒にいて障害者（児）が言いたいことを代弁してくれる人の存在もとても大切であることもわかってほしい。

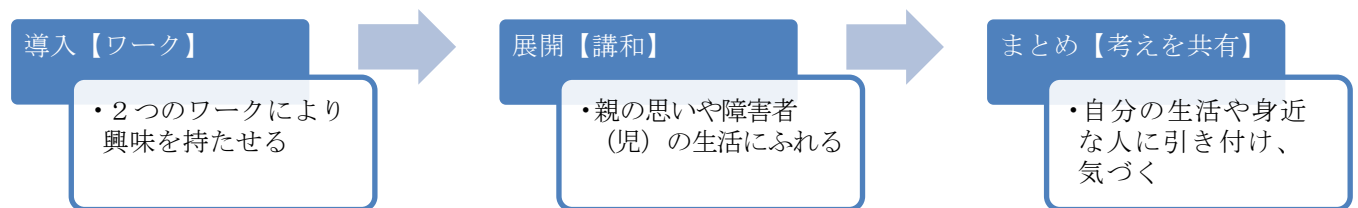
また、保護者に自分の子どものことを語ってもらうことにより、客観的に子どもをみたり、保護者自身が伝える力を付けてほしいとも考えている。

#### 5. プログラムの提案

<このプログラムがどのような場面に活用できるか>

子ども、若者はもちろんのことながら、大人の方々にも、わかってほしいと考えている。

<概要>



#### 《注意点・課題》

- ① 「知的障害の疑似体験」を実施しようとする実施先が少ない。
- ② 知的障害のある方々は、多様であり、対処方法もそれぞれであるので、画一的な方法論が提示できない。
- ③ 日常的に一緒にいる知的障害者（児）の問題として、取り上げられることの難しさ。  
指導者の伝え方や福祉観が大きく影響することがある。
- ④ 活動者側についても、自分たちの子どもを理解してもらい、地域に伝える役割を担う保護者が少ない。

#### 《予想される効果》

- ① 知的障害者（児）も自分たちと同じような感情があり、分かり合えるという意識を持ってもらう。
- ② 生活の中で、「伝えたいことが伝わらない」、「何を言っているのかわからない」ことを相互に理解しようとする姿勢を養ってもらう。
- ③ 障害があってもなくても対等な人間として扱うことが当然の社会となることを考えてもらう。

# 高齢者理解プログラム～自分でできることを考えて実践する～

実践者：鶴ヶ島市福祉教育・ボランティア学習推進員 ういず・共に 木口真理子

## 1. 背景と目的

高齢者の人生経験の豊かさや、心身の特質について知ることによって、高齢者を敬うと共に労わる心を育む。

また、高齢者にも子ども時代があり、子ども達もいつかは大人になり高齢者になることを理解し、誰にも人生のライフサイクルのステージがあり、そのことを考える。

## 2. 本プログラムの目的

- (1) 高齢者に対するイメージを出し合い、高齢者を身近に感じる。
- (2) 高齢者の方の話を聞くことにより、その方の人生観に触れる。
- (3) 加齢による心身の変化について理解する事で、周囲の理解と支えの必要性に気づく。
- (4) 「高齢者が元気に暮らせるまち」を目指した市民ボランティアによるサロン活動について知ることによって、支え合いの大切さに気づく。
- (5) ふれあい・いきいきサロンもしくは高齢者施設等を訪問することを想定して、自分たちにできる事を考えさせることによって、ボランティア活動への参加意欲を育む。

## 3. プログラムの概要(流れ)

### 1. 高齢者のイメージについてまとめる

- ・ プラスイメージ、マイナスイメージ(ポストイット2色)

身体面	精神面	その他

### 2. グループごとに発表しあう。

予想される反応

- ・ 優しい ・ 物知り ・ 料理が上手 ・ 耳が遠い
- ・ 動作が遅い 等

### 3. 高齢者の方の話を聞く。

話のポイント ①小中学生の頃について②現在の心身の状態について(若い頃と比較して)③現在の楽しみ、生きがいについて

### 4. 加齢による高齢者の心身の変化について理解する。

- ・ 配布資料にそって説明する・認知症についても触れる。
- ・ 「高齢者が元気に暮らせるまち」を目指し市民ボランティアによってふれあい・いきいきサロン活動が実施されていることを知る。



軍手をして折り紙をおるワーク





\* 鶴ヶ島市内には、70か所の様々なふれあい・いきいきサロン等のみんなが集える場があり、歩いて行ける範囲の中で定期的開催している。

5. ふれあい・いきいきサロン等で行われている体操や脳トレゲーム等のいくつかを紹介し、体験してみる。

6. 利用している高齢者の声を紹介する。

※元気になる。家では話し相手がないが、ここに来るとたくさんおしゃべりができて楽しい。大勢でお昼を食べるのでより美味しい。等々

7. 自分たちがふれあい・いきいきサロンや高齢者施設を訪問すると想定して、何かできる事はないか考える。

8. グループごとに提案発表する。

#### 予想される反応

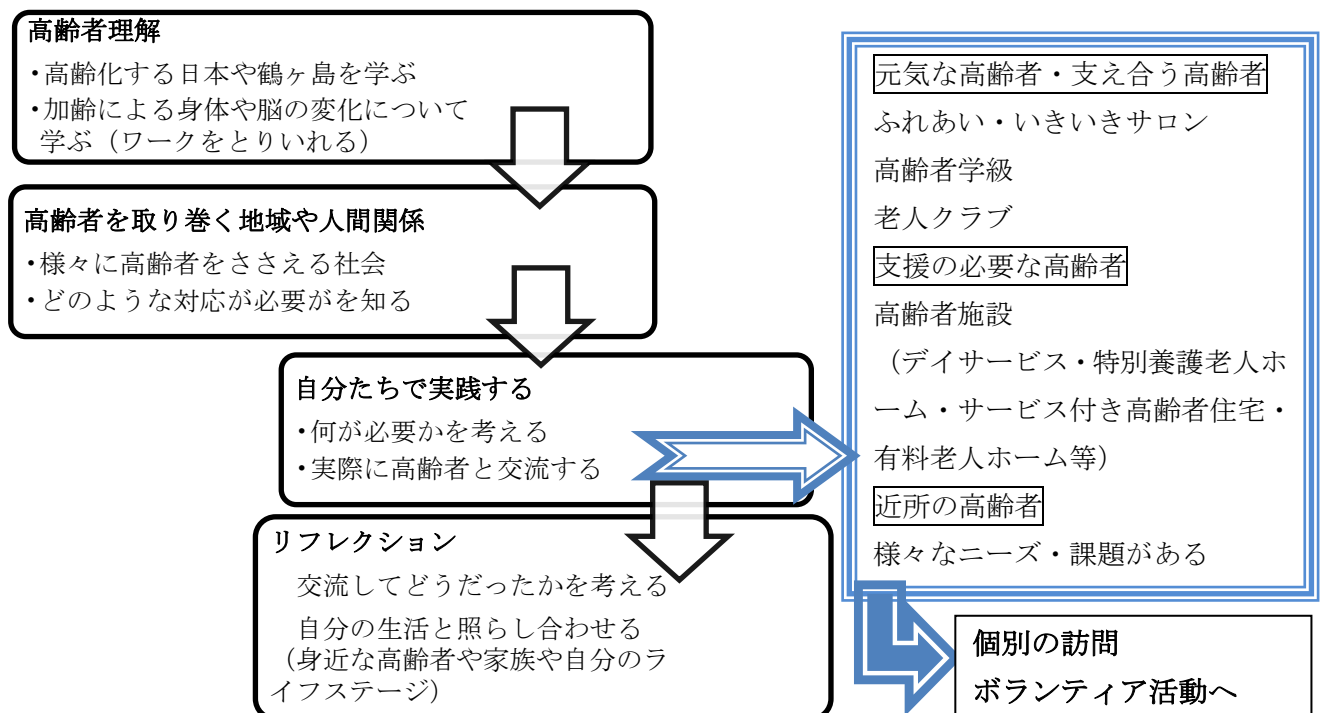
- ・合奏や合唱、ダンス、劇をする。
- ・話し相手をする。インタビューをする。
- ・とんち文字クイズ、ゲームを作る。等



#### 4. まとめ(考察)

本プログラム体験を通して、高齢者を身近に感じ、好感を持って接する心を育む。また、戦争経験者も次第に少なくなり、大変な時代を生きて来られたお話しを聞く貴重な機会でもあると考える。高齢者支援のボランティア活動を知ること、自分たちにもできる事はないかという気づきに繋がることを望む。さらに、自分の親、祖父母、曾祖母の生きてきたライフサイクルを感じ、自分自身にも置き換える。また、その時代背景をすることで社会全体の流れも把握する。

#### 5. プログラムの提案



# サービスラーニングの視点を用いた車いす体験プログラム

実践者：鶴ヶ島市福祉教育・ボランティア学習推進員 ういず・共に 木口真理子


## 1. 背景と目的

車いす体験講座は、学校からのニーズも高く、多くの学校で実施されている。定番になっている車いす体験学習において、車いすの扱い方を理解し、当事者の生活を理解し、社会のバリアについて学ぶことを目的にしている。このプログラムでは、気づきを共有することにより、さらに、当事者に会ったときに、どんなことができるのか、どんな声かけができるのかを考える機会とする。さらに、困りごとや社会の不便さを感じるにより、自らできることを考えることができるプログラムを目指している。

## 2. 本プログラムの目的

- (1)アイスブレイクとして、車いす名称クイズを行い、車いすに興味を持たせる。
- (2)当事者の話を聞くことにより、障害を受け入れ、前向きに暮らす姿を感じ取らせる。
- (3)声掛けのロールプレイを行い、当事者との距離を縮める。
- (4)車いすに乗る、介助する、という一連の体験を通じて、バリアフリーについて体感させる。
- (5)体験の振り返りを通じて、ハード・ソフト両面からバリアフリーについて考えさせる。

## 3. プログラムの概要(流れ)

流れ	注意事項など
1.挨拶	 <p>車いす名称クイズ</p> <p>※事前に聞きたいことを考えておく。</p> <p>推進員が行うのを見学させる</p> <p>※駅やマーケット等で車いすの方と出会ったと想定して、数人の生徒に自分なりの言葉で声掛けをさせる。</p> <p><b>予想される反応</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 何かお手伝いする事はありますか。</li><li>• 大丈夫ですか。</li><li>• 何か取りますか。 等</li></ul>
2.アイスブレイク	
3.当事者のお話を聴く。	
4.質疑	
5.車いすの操作について理解する 開く・閉じる動作 段差・坂道・階段での操作方法	
6.声掛けのロールプレイを行う。	

流れ	注意事項など
7.二人組で車いす体験を行う。	※基本の扱いを体験した後、バリアフリーを考慮しながら校外のコースを回る
8.ワークシートをまとめる。	
<b>休憩</b>	
9.ワールドカフェ	※話し合う課題は、 グループ1「乗ってみて」、グループ2「介助してみて」、 グループ3「気づいたこと」 ※「気づいたこと」では、バリアフリーについて考えさせる。  <b>予想される反応</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いつもの景色が違って見えた。</li> <li>・車いすが傾くとすごく怖かった。</li> <li>・道のでこぼこを強く感じた。</li> <li>・押して行くのに結構力がいって大変だった。</li> <li>・声掛けをして、介助をしてくれると安心できた。</li> <li>・車いすの機能アップが必要</li> <li>・当事者の方からも遠慮しないで声をかける。</li> <li>・道の整備 等</li> </ul>
10.各箇所で出された意見や感想を発表し合う。	

#### 4. まとめ(考察)

##### (1)車いす利用者の強さを感じる

車いすを扱う技術の伝達を主と捉えず、車いす体験を通して、障害を受け入れて前向きに生活している障害者の強さを感じ取ってっもらいたいと考える。

##### (2)ハードとソフトのバリアフリー

バリアフリーについては、ハード面だけでなくソフト面からも考えさせる事で、共生を意識するきっかけにする。

##### (3)気づきと主体性の育成

声かけのロールプレイを行うことにより、疑似体験での心構えができる。また、ワールドカフェを行うことにより、自分の感じたことを言葉にすることができ、他者の気づきを知ることができる。

#### 5. プログラムの提案

<このプログラムがどのような場面に活用できるか>

車いす体験は、最も一般的な体験である。大がかりでもあり、インパクトも大きいと考えるが、車いす体験を実施することが目的とならないために、体験だけで終わらせない工夫が必要である。



また、どの年代でも学びがあることから、学校内だけではなく、地域でも実施する働きかけも必要である。学校の授業などで行うときは、保護者や地域住民にも参加、サポートを促し、親子で話題にしてもらうことが必要である。

＜概要＞

学校で行われる福祉教育は、学習計画があり、その中の 1～2 時間(45～90 分)での実施となる。我々が依頼された時間内で、車いすの体験と当事者の話だけではなく、気づきを促すところまで意識したプログラムを作成することで、サービスラーニングの目指す自らできることを考えることができると考えている。

① 導入

\*アイスブレイクを行うことで、子どもたちの興味を引く。



② 当事者の話

\*リアリティにある当事者の声を聞くことにより、意識してもらう。



③ 車いすに触れる・ロールプレイ



④ 車いすに乗る、押す、コースを回る体験



⑤ ワールドカフェ

\*意見を出し合うことで、考える。他の人の意見を聞き、さらに考え、自分のできることを考える。



⑥ 振り返り・まとめ



《予想される効果》	《注意点・課題》
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 車いすの方に配慮ができるようになる。</li> <li>○ 障がいがあっても、前向きでその人らしい人生があることを知るにより、自分に置き換えて前向きになる。</li> <li>○ 自分たちのまちのバリアフリーに関心を向けるようになる。</li> <li>○ ロールプレイでは、実際の場面等で活用できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 車いすでふざけてしまう。。という場面がある。危険な行動であることを認識させる。</li> <li>○ 現在、鶴ヶ島市では車いす利用ユーザーで体験の講話のできる方が少ない。当事者不在の体験では、リアリティに欠け、当事者の思いが伝わらないことがある。 *現在はなんとか調整を行っている。</li> </ul>

# 主体的に考え、ふだんの生活に活かすHUG(避難所運営ゲーム)プログラム ～防災教育からつながるふだんの生活へ～

実践者：鶴ヶ島市福祉教育・ボランティア学習推進員 ういず・共に 木口真理子

## 1. 背景と目的

HUG(避難所運営ゲーム)プログラムを体験することにより、避難所にはさまざまな人々が来所すること、災害時は要援護者への配慮をはじめ、様々な対応が求められること、地域住民の支え合いの大切さに気づき、参加者自身がどのような対応ができるのかを考えることができる。また、この対応は、日常生活の延長線上にあることを認識し、ふだんの生活に活かしてもらう。



さらに、このプログラムは実際の地域の方々と出会うことができるために、顔の見える関係をつくることができる。

## 2. 本プログラムの目的

- (1)HUG の意味、ゲームの進め方についてしっかりと理解し、主体的に取り組むことができる。  
(機械的に振り分けない。)
- (2)カードの振り分けについて、多方面から考えられ、避難所の現状を実感できる。
- (3)グループごとにゲーム中の様子を発表し、様々な対応の仕方があることに気がつく。
- (4)避難所において、自分たちにできる事を考え、各自が一支え手になれることに気がつく。
- (5)地域の方々と一緒に取り組むことで、顔の見える関係づくりができ、共に地域課題に取り組む関係をつくることことができる。

## 3. プログラムの概要(流れ)

流れ・注意事項	必要な道具など
1.挨拶	
2.HUG について(意味、ルール、被災状況)の説明	
3.アイスブレイク ※カードは使用せず、氏名・今最もはまっている事を話すでも可	アイスブレイキングカード
4.カードの振り分け作業	HUG カード、配置図
5.各自で悩んだ事、困った事の書き出し ・配慮した事 ・気付いた事 等について各自でポストイットに書き出す(1件1枚)	ポストイット(3色)
休憩	

流れ・注意事項	必要な道具など												
<p>6.グループごとに ポストイットに書いたことを発表し合い、意見の集約を行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">◎悩んだ事、困った事</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">◎配慮した事</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">◎気づいた事</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">■</td> <td style="text-align: center;">■</td> <td style="text-align: center;">■</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">■</td> <td style="text-align: center;">■</td> <td style="text-align: center;">■</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">■</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> </div> <p>7.集約された意見を発表し合いながら、意見交換を行う。</p> <p>※悩んだり、困ったりした点について他のグループはどうだったか？</p> <p>※同じケースに関して、異なる配慮をしたグループはないか？</p> <p>※HUG ゲームに正解、不正解は無い。</p> <p>対応したことが現実であり、意見が違うことも大切なプロセス</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>予想される反応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ペットを連れて来た人への対応</li> <li>・ 高齢者は、こども連れへの配慮</li> <li>・ トイレの対応 等</li> </ul> </div> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div> </div> <p>8.避難所において自分たちにできる事はないかグループで話し合う。</p>	◎悩んだ事、困った事	◎配慮した事	◎気づいた事	■	■	■	■	■	■	■			<p>模造紙、マジック</p>
◎悩んだ事、困った事	◎配慮した事	◎気づいた事											
■	■	■											
■	■	■											
■													
<p>9.各グループの提案を聞く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>予想される反応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小さい子の遊び相手</li> <li>・ 高齢者の話し相手</li> <li>・ 避難者の声を収集する</li> <li>・ 教室への誘導係</li> <li>・ 物資の配布作業の手伝い 等</li> </ul> </div> <div style="border: 2px solid orange; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <p><b>避難運営ゲーム(hinanjyo unnei game)とは</b></p> <p>大震災起きたとき、避難者の年齢、性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか。また、避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくか、などを模擬体験するゲームです。</p> </div>													

#### 4. まとめ(考察)

##### (1)子ども達自身の意見を大切にす

ファシリテーターは、子どもたちが、カードをこなすことに集中するのではなく、ケースごとに思いを巡らすよう配慮している。子どもたちの意見を誘導することのないよう、子どもたちの思考を見守ることにより、自らのこととして考えることができる。

##### (2)自分ごととして考える

展開の最後の、避難所において自分たちにできる事について考える活動が最も重要と捉えており、前段階のカードの振り分け作業を通して、避難所の現状を理解することが、最終活動の深い思考に繋がると思われる。

##### (3)非常時に対応できる主体性を創る

避難時に限らずあらゆる非常時において、自分にできる事はないかと考える姿勢は、とても大切な事であり、そのような芽を育む体験となることを望んでいる。

## 5. プログラムの提案

<このプログラムがどのような場面に活用できるか>

自分たちの一番身近な学校の配置図を活用し、また、設定条件も実施日に近い設定を行い、さらに、地域の方々、特に防災活動に取り組んでいる自治会や支え合い協議会の方々と一緒に協働実践を行う事により、さらに、意識が高まることが期待できる。

地域の集まりでも実施する場合に、子どもたちも主体的に入ってもらうことにより、さらに意識が高まると考える。防災教育としても大きな効果がある。

<概要>

① HUGカードを使って災害時の振り分けを行う。

全員が参加できるような配慮。できるだけリアリティのある素材を使う。

② 教室全体で悩んだこと困ったことについて共有。それぞれどんな対応をしたかを共有する。

対応に正解はない、その結果を生み出したプロセスが大事。

③ 自分たちができることを個別で出したのち、グループで話し合い、グループとしての意見をまとめる。

グループごとに発表をするので、活動宣言といった意味での効果もある。

\*ある年の先生のまとめから

「災害時の避難所のことを考えましたが、災害時に急にやろうと思ってもなかなかできないので、日常生活の中から、気をつける必要があります。今日から意識しましょう」

《予想される効果》	《注意点》
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 現実味のある素材を使うことにより、よりリアリティのある活動となる。 * 鶴ヶ島市の場合、福祉教育・ボランティア学習推進員で話し合い、実際にいる世帯をイメージしてカードを作成。</li> <li>○ 子どもから、高齢者、障害者等どの世代でもどんな障害者であっても、防災という同じテーブルで話し合える場となる。</li> <li>○ この活動を通じて、日常的に顔の見える関係をつくり、日常的に自分自身に何ができるのかを考えるきっかけとなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 一緒に入る地域の大人が、現状(正解)を行ってしまうことで、考える力をそいでしまうことがある。また、逆に間違った知識を植え付けてしまうこともあるので、注意する。 * 正解はない</li> <li>○ グループワーク活動のため、意見を述べるのが慣れていない場合は、話す人が偏ったり、声の大きな人の意見だけがとおる場合がある。グループメンバーが参加することにより、協議の場となるよう配慮する。</li> </ul>

# ～小さくあたたかい命に触れ“いのち”を感じる～ 「いのちの授業」学習プログラム

実践者：Baby-smile 倉持 尚美

## 1. 背景と目的

昨今、自殺やいじめ、虐待など命に深く関わる痛ましい事件を耳にすることが多く、命が軽視化される傾向が大きな社会問題となっている。これら事件の背景には様々な要因があると考えられるが、核家族化や兄弟がいない家族構成、動物を飼育できない生活環境、バーチャルな世界でリセットできる命の感覚等 昔に比べ幼少期から思春期にかけて“いのち”の尊さを学ぶ機会が著しく乏しくなっていることもその要因一つであると考えられる。

成長過程において幼き頃から「いのちの大切さ」を学んできているはずだが、起きてしまういじめや虐待。改めて（次代を担う）思春期の若者が“いのち”の尊さを深く心で感じる機会を設けることで、自己肯定感やより良い人間関係への形成に影響を与えるものと信じている。

また、妊婦や乳幼児の子育て中の母親は、子育てのため社会との関係性が持ちづらくなり、社会から必要とされている存在であるとの実感が持ちにくい状況にある。本プログラムは若者への働きかけと同時に、そのような子育て中の母親が協力者となって思春期の若者へ自身の体験や想いを伝えることが社会貢献となり、協力者自身にも自己有用感が得られる活動となっている。

## 2. 本プログラムの目的

- (1) 小さな“いのち”に触れ、尊さを感じる
- (2) 親などの周囲の大人の愛を知り、“いのち”が自分だけのものではないことに気づく
- (3) “いのち”について自分事としてとらえる（これまで、現在、将来）
- (4) 自分の“いのち”と同じように他者の“いのち”も尊いものであることを学ぶ

## 3. プログラムの概要(流れ)

### (1) 事前打ち合わせ

- ① 中学校 3 学年担当教諭、養護教諭との「学習のねらい」「当日の流れ」「特別な配慮が必要な生徒がいるか」を確認（多感な時期なため、家庭環境や自己の生き立ちで傷つけることがないよう）
- ② 当日の協力者である当事者（妊婦・乳児の母親）と「生徒との対話の内容について」を確認

### (2) 当日の流れ

- ① 当事者（妊婦・乳児の母親）から話を聞く
  - ・できるだけ少人数で、同じ目線で語り合えるよう環境に配慮する





- ・話の内容は、最後には前向きな言葉で終わるように工夫する
- ・親でも先生でもない地域の大人から話を聞くという体験を大切に考える

## ② 小さな あたたかい“いのち”に触れる

- ・妊婦さんのお腹を触らせてもらい、そこにある“いのち”を感じる
- ・乳児を抱っこさせてもらったり、あやしたりし赤ちゃんの可愛さ  
小さな“いのち”を感じる
- ・守られなければ生きられない小さい“いのち”の存在と愛おしさを感じる



## ③ 守るべき“いのち”を感じ、自分の生い立ちと今、将来に重ね合わせて考える

- ・周囲の愛があって、ここまで成長できたことに気づく
- ・自分がかげがえのない存在であること、と同時に友人も同じようにかげがえのない存在であることに気づく
- ・将来大人になり、子どもと触れ合う時の自分を想像する

## ④ 妊婦の疑似体験をし、体への負担や妊婦への配慮を学ぶ

- ・妊婦に対してどのような配慮が必要かを知り、自分にできることを考える。行動する
- ・妊娠の喜びを疑似的に体験し、将来を想像する



## ⑤ 聞いたことと体験したことの振り返りを行う

- ・話を聞き感じた想い、体験した感想を発表する
- ・当事者からメッセージを発信
- ・(後日) 自分に何ができるか、自分はどうありたいかを  
個々でまとめ具体的な行動へつなげる



#### 4. まとめ(考察)

---

##### (1) 心で感じる学び

世の中には様々な情報で溢れているが、この学習に参加した生徒の表情は実に生き生きとし、リアルなあたたかい“いのち”に触れることで頭ではなく心で感じる学びとなった。

##### (2) 医学的な命でなく“いのち”を考える

地域の当事者を招き新たな“いのち”を授かった喜びや愛おしさを語ってもらうことで、母親や周囲の大人の愛や優しさを感じ、自分が今日まで成長してこられた過程、他者(友人)との関わり、大人になった将来を想像する時間を得る。そのことで、子どもから大人にかわる思春期に“いのち”や生き方のヒントを得る機会となった。

##### (3) 気づき行動する

妊婦の疑似体験からは、自らお腹を愛おしそうに撫で名前を付けて声をかける生徒や靴が履きにくい状況に手伝う生徒、階段で自然に手を添える生徒、優しく声をかける生徒など 妊婦に対しての配慮や自発的な手助けの様子が見られた。自ら体験することで気づけることや介助者とペアで組ませることで、今の自分が日常で出来る具体的な行動にも結び付けることができた。

#### 5. プログラムの提案

---

##### 《活用できる場面》

「自己肯定感や他者への思いやりの心を育む」ことをテーマに、小学生高学年、中学生、高校生に対して学習が可能。その際には年齢や環境に配慮した企画が必要となる。

疑似体験の後「振り返り・まとめ」としてワークや語り掛けをする時間を設けることで、「性」に対する正しい知識や表に出せなかった不安や違和感を持った生徒がいた場合へのフォローができる内容プログラムが望ましいと考える。

##### 《配慮・注意点等》

- (1) 「性」への配慮 (性的マイノリティ ほか)
- (2) 価値観や個性の尊重
- (3) 将来に対しポジティブなイメージを持てる学習構成を意識する
- (4) 周囲には相談できる大人がいることを伝える

# 子ども達と入居者にとって新たな気づきが生まれる交流 ～小学生と高齢者のふれあいプログラム～

実践者：特別養護老人ホームみどりの風・嶋野博之

## 1. 背景と目的

福祉の心を育む交流事業では、子ども達が施設で高齢者と交流を図ることにより高齢者への理解を深める。自らの活動がポジティブな変化を生むということを体感することにより、福祉の心を育むことを目的としている。また、交流の場は高齢者が子ども達の教育者として活躍の場となる可能性がある。子ども達と高齢者の双方にとって、価値のある事業として成り立つプログラムの構築を目指す。

## 2. 本プログラムの目的

- (1)小学生が高齢者と接する機会を作る。認知症高齢者への理解を深める。
- (2)入居者が主体的に参加することにより、入居者にとっても社会貢献や社会交流の場となる。
- (3)施設での活動を通じて、施設と地域住民との距離を近づける。

## 3. プログラムの概要(流れ)

《事前準備》①日程や参加人数の確認 ②活動内容、当日の段取りの確認

③受け入れユニットとの打ち合わせ

《入居者の協力》入居者に対しても、活動の趣旨を説明する

《事前学習》活動前に施設概要や認知症の理解を促す

最初に、施設で行っているリハビリ体操や指を使った運動を行う。みんなの緊張がほぐれたところで、特別養護老人ホームとは、どんな施設なのかを〇×のクイズ形式で行う。

- 1 問目 みどりの風鶴ヶ島は、オープンしてから10年以上たつ。
- 2 問目 みどりの風鶴ヶ島は、おじいちゃん、おばあちゃんが生活しているところである。
- 3 問目 みどりの風鶴ヶ島で生活している人は、クラスの人数より多い。
- 4 問目 みどりの風鶴ヶ島でもお正月にはおせち料理が出る。
- 5 問目 みどりの風鶴ヶ島で暮らしているおじいちゃん、おばあちゃんは、はま寿司に行くことがある。
- 6 問目 みどりの風鶴ヶ島では、いろんなクラブ活動がある。
- 7 問目 みどりの風鶴ヶ島では、体が不自由な人はお風呂に入ることができない。
- 8 問目 みどりの風鶴ヶ島のおじいちゃん、おばあちゃんは、お年寄りなので自分で出来ることは何もない。

最後に、認知症の理解を深める内容の紙芝居を観てもらい、事前学習を終える。



## 《事後学習》学習の振り返り

### 【授業の様子】



(リハビリ体操)



(みどりの風〇×クイズ)



(紙芝居)

### 《児童たちの活動の様子》



あまり高齢者と関わる機会がないとのことで、最初は緊張しながら接しているが、徐々に表情も和らいでいく。とても良い表情で活動を行っている。「私と話をすることで、おばあちゃんが笑顔になるのがうれしい」と言っていた。この経験の振り返りを行う。



入居者にとっても社会貢献の場である。児童の皆さんも真剣に話を聞いている。入居者の中には、子ども達にとって教育の機会であるということを理解されている方もいる。

## 4. まとめ(考察)

事前学習は、〇×のクイズ形式で行った。クイズ毎に写真などを使い、施設での生活の様子を紹介する。クイズを進めていくうちに、最初は、高齢者を何もできない存在であると思っていた子ども達が、徐々に高齢者をいろいろなことが出来る方たち、とても力がある存在であると認識が変わっていくことを感じた。最後の問題の「みどりの風鶴ヶ島のおじいちゃん、おばあちゃんは、お年寄りなので自分で出来ることは何もない。」では、ほぼ全員の子供たちが、出来ることがたくさんあるに手をあげていた。また、高齢者の方、とくに認知症を患っている方とのコミュニケーション技法についても取り上げ、実際の活動時の注意点などを伝えた。

交流体験当日の子ども達は、入居者の方が車いすで生活している方が多いことや、耳が聞こえにくい方、目が見えにくい方が多いなどの情報をもとに、活動内容を考え準備していた。コミュニケーションにおいては、目線を合わせて、笑顔で大きな声で話すなどを意識した関わりをしており、一方的なコミュニケーションではなく会話のあるコミュニケーションが出来ていた。事前学習での学びから、子ども達がイメージした高齢者像と実際に関わることにより感じたことのギャップを、事後学習において振り返りを行うことも必要である。

子ども達が「私が話したら、おじいちゃんがとても嬉しそうだった。また会いたいな。」と言っていた。小学生の交流事業では、子ども達にとって自分の存在が、入居者に笑顔や元気を与えることが出来ることへの気づきを大切にしたい。

この交流事業における入居者への注意事項としては、交流を行う事による入居者の意識の変化やエンパワメントに注目しながら、事前の働きかけ、役割のあり方を確立していく必要があると考える。入居者と事前の打ち合わせやその後の振り返りを行ったが、事前の打ち合わせでは、入居者に交流事業の目的やねらいを理解してもらい、事前学習の子ども達の様子やどんな質問があったかを伝えた。実際の交流の場面では、30分と活動時間が短かったこと、入居者1人に対して子ども達が3~4名での交流であったため、入居者は子ども達の質問に答えるので精いっぱいとなっていた。事後の入居者への聞き取りでは「楽しかったよ。もう少し時間があればね。難しい質問もあり、とっさにこたえることができなかった。でも話が出来て良かった。次はもっとうまくやりたい。」といくつかの課題と入居者の前向きな姿勢を確認することが出来た。

## 5. プログラムの提案

《交流事業は子ども達の学習の場であり、高齢者の活躍の場である》

### ＜プログラムの流れ＞

#### 1、学校側との事前学習、交流事業の打ち合わせ

今までの学習の内容や交流事業における学校の意向を確認する。  
それに合わせて事前学習の内容を打ち合わせ、入居者にとっては社会貢献の場となることもお伝えする。



#### 2、利用者との事前の打ち合わせ、交流後に振り返りを行う。

入居者に交流事業の趣旨や事前学習の様子などをお伝えする。  
子ども達の福祉教育の為に皆さんの力が必要であることを説明する。  
交流後、うまくできたこと、うまくできなかったことを聞き取る。



#### 3、事前学習の実施

45分の時間で事前学習を行う。クイズ形式で特養とはどんな場所なのか、入居者はどのような生活をしているのかをお話する。事前学習の際には高齢者とのコミュニケーション技法についてお話する。実際の交流では目線を合わせて聞き取りやすいようにはっきりとお話しをすることをしっかりと実践していた。一方的なコミュニケーションではなく、会話のある交流が出来ていたことが事前学習の成果として挙げられる。

予想される効果	気を付ける点
<ul style="list-style-type: none"> <li>子ども達が、高齢者の情報を持ち、交流を行うことができる。</li> <li>子ども達が事前情報により、事前にイメージを持つことが出来る。そのイメージと現実のギャップが学びになる。</li> <li>入居者とも打ち合わせして、交流が勉強の場であることを理解してもらい、入居者に社会貢献の場を作ることで主体的に参加する意識を持ってもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間が限られているため、一方的な関係になってしまう。職員のサポート体制を準備する。</li> <li>先生にも認知症の理解をしていただく。入居者の状態を理解した活動内容にするため、事前のすり合わせが必要。</li> <li>学校側、職員、一部入居者と事前に交流の趣旨を確認しておくこと。</li> </ul>

# 多感な中学生の心を揺らす職場体験

実践者：介護老人保健施設 鶴ヶ島ケアホーム/小池 真由美

## 1. 目的

---

高齢者施設での社会活動体験（3日間）を通して、多くの人とふれあい、学校では得られない経験を積むことで、豊かな感性や社会性、自立心を養い、たくましく豊かに生きる力を育む。又、中学生の職場体験を通し職場の活性化を図るとともに、サービスとケアの質の向上につなげたい。

## 2. 本プログラムの目的

---

- (1)職員や利用者とのコミュニケーションをとり他人との関わり方を学ぶ。
- (2)社会のルールやマナーを学ぶ。
- (3)働くことを実感し、働くことに関心を持つ。
- (4)進路や職業の選択に活かす。

## 3. プログラムの概要(流れ)

---

### 1.中学校からの依頼

### 2.中学校担当教員との打ち合わせ

○受け入れ生徒の確認。中学生の能力を考えて体験内容を決める。

### 3.中学生の事前訪問

○職場体験の実施期間・時間・持ち物・服装の確認

○施設説明と高齢者について説明

○体験に当たっての注意事項の伝達

- ・挨拶、言葉遣い、態度、身だしなみ、体調管理、欠席連絡、個人情報保護などの説明。
- ・利用者の身体状況の把握をせずに、利用者の身体に触れる介助や移動の介助（車椅子を押す、歩行の介助など）をすることは、事故発生リスクがあり危険なため、体験できないことを伝える。ただし、入浴後の頭髮のドライヤーかけは、自分の手にドライヤーをあてながら、温度調整に留意し実施してよいこととする。資格がないとできない仕事があることの説明。
- ・利用者さんとお話をするときには、目線を合わせてゆっくりとはっきり話す。
- ・大きすぎる声は出さないこと。驚いて転倒することがある。
- ・利用者さんの後ろから声をかけない。振り返って、バランスを崩し転倒することがある。
- ・館内は走らないこと。歩行練習をしている利用者さんがいるため、衝突すると危険。

○職場体験のスケジュール（表-1）を渡し、説明する。



○生徒の態度、体験への意欲 や関心、人との関わり方、進路 や将来の職業の目標の有無などから、職場体験の部署を決める。

○生徒からの質問に答える。

- 質問の例**
- ・担当者の職種は何か？
  - ・ここには、どんな職種の人が何人くらい働いているのか？
  - ・この職業を選んだ理由は何か？
  - ・良かったことは何か？
  - ・辛かったことは何か？
  - ・利用者さんがここで亡くなることはあるのか？

#### 4.受け入れ当日

○注意事項を再確認する。

**\*中学生は、緊張していることを理解する。**

#### 5.受け入れ最終日

○体験の感想を聞く。

～後日お礼の手紙が届く。

表-1

#### 中学生職場体験スケジュール（〇〇課）

9:00	オリエンテーション 利用者様のお出迎え お茶の準備/利用者様とお話をする
10:00	お茶のコップ片付け リハビリ体操・ダンベル体操の準備
11:00	昼食準備（おしぼりとお茶を配る） 配膳・下膳
12:00	〈休憩〉
13:00	利用者様とお話をする 入浴後のドライヤーかけ
14:00	レクリエーション補助 おやつ・お茶の準備と配膳
15:00	コップと皿の後片付け 送迎見送り 利用者様とお話をする
16:00	〈終了〉



#### 4. まとめ(考察)

##### (1) 職員や利用者とのコミュニケーションをとり他人との関わり方を学ぶ。

今まで一度も話したことのない職員や利用者とは話をすることは、とても難しいと感じるであろう。何から話そうか、どんな話題を持ちだそうかと考えることが、他人との関わり方を学ぶ第一歩になる。

##### (2) 社会のルールやマナーを学ぶ。

今までは、それぞれの家庭の生活習慣と、学校や地域の活動から社会のルールやマナーを学んでいたが、職場体験をすることで今までの経験では得られなかったルールやマナーを学ぶ機会となる。

##### (3) 働くことを実感し、働くことに関心を持つ。

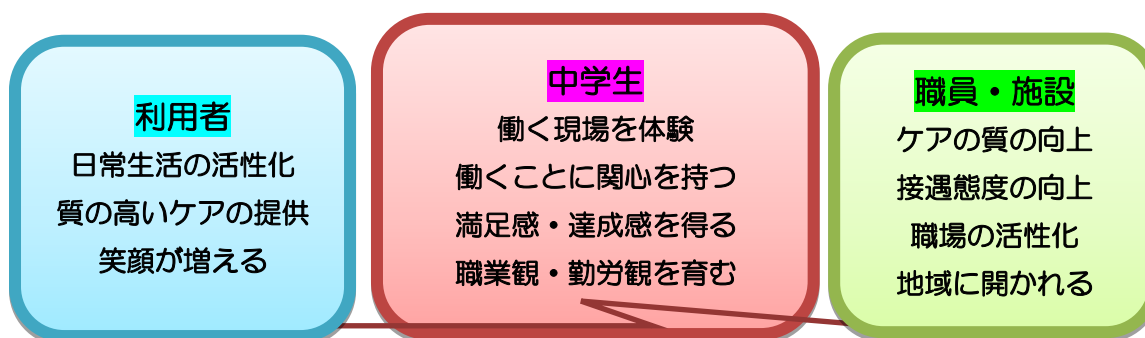
労働を体験することで、厳しさや喜びを実感する。労働で得られるものは、自立心や報酬だけではなく、大きな満足感や達成感、生きる意欲につながる。中学生が体験に来ることで、職員も同じ思いを共有することができ、労働意欲につながる。

##### (4) 進路や職業の選択に活かす。

職場体験で得られた体験が進路や職業の選択に影響を与えると考える。社会体験が新たな目標設定となることもあれば、他の職業に新たな関心が向くこともある。職場体験を通し、さまざま進路や職業が存在することに気づき将来設計の視野が広がる。

#### 5. プログラムの提案

##### 【予想される効果】



高齢者施設での体験を希望していなかった中学生も、利用者から「ありがとう」と何度も言われ、来てよかったと感じる。

職員の接遇・介護技術・知識の向上→職員の労働意欲につながる→介護現場の活性化  
→利用者の生活も活性化・利用者へ質の高いケアが提供される

##### 【注意点】

- 指導する職員の目的意識、指導能力に個人差があり職場体験の質に差が出ることもある。
- 希望する職場体験に参加できずに、やむを得ず介護施設の職場体験をする生徒もいる。
- 利用者の生活に悪影響がでないように注意したい。(日課の変更、中学生の態度、個人情報情報の漏えい、事故など)

# 尊厳と社会連帯の意識を高める教員養成のための「介護等体験」

実践者：介護老人保健施設 鶴ヶ島ケアホーム・小池 真由美

## 1. 背景と目的

介護等体験は、「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」により、1998（平成 10）年度の大学等入学者から実施されるようになった。

教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性を考慮して、教員の資質向上及び学校教育の一層の充実を図ることを目的としている。

## 2. 本プログラムの目的

- (1) 個人の尊厳の理解を深める。
- (2) 相手を思いやる気持ち、人間理解を深める。
- (3) コミュニケーション技術を学ぶ。
- (4) 介護現場の職種間の連携から、チームワークの大切さを学ぶ。

## 3. プログラムの概要(流れ)

【介護等体験 受け入れの流れ】

介護等体験	〇〇課	〇曜日
-------	-----	-----

<施設>	<学生>
埼玉県社協から受け入れ協力依頼の通知  介護等体験実務説明会に参加  受け入れ計画書及び受け入れ連絡票の送付  受け入れ決定通知書が届く  介護等体験受け入れ準備を開始 <ul style="list-style-type: none"><li>・受け入れ予定表を作成</li><li>・受け入れ先の所属長に介護等体験の説明をする。</li></ul> 所属長は、課内の職員に受け入れの説明をする。  <b>《体験当日》オリエンテーションの実施</b> <b>5 日間の指導</b>	介護等体験の申し込み      受け入れ決定通知書が届く  書類（自己紹介票・健康診断書等）を作成   体験の一週間前迄 施設に書類を施設に送付   <b>《体験当日》オリエンテーションを受ける</b> <b>5 日間の介護等体験の実施</b>

8:30	朝食後の片付け（下膳、床掃除、テーブル拭き）
9:00	利用者の話し相手
9:30	環境整備（シーツ交換など）
10:00	お茶（水分補給）の準備・後片付け
10:30	レクリエーション補助
11:00	昼食準備（エプロン、おしぼりなど準備）
11:30	〈休憩〉
12:30	食後のテーブル拭き・床掃除
13:00	利用者の話し相手
13:30	レクリエーション補助
14:15	おやつ準備・後片付け
15:00	利用者さんの話し相手 散歩・外気浴などの補助
16:00	〈終了〉



### 《学生が実施するレクリエーションについて》

5日間の体験の最終日に、学生がレクリエーションを実施します。

体験3日目に、最終日に行くレクの内容を指導者に相談し、アドバイスを受けます。

はじめの4日間は、職員の行うレクリエーションの補助 最終日にレクリエーションを実施  
 好評だったもの・・・楽器の演奏、楽器の演奏に合わせて体を動かす、楽器に合わせて歌う、  
 てるてる坊主など作品作り、体操、手指の運動  
 不評だったもの・・・英語の歌、英単語クイズ

☆利用者さんの喜ばれる姿、感動して涙を流す姿を見て、体験最終日であることを実感し、  
 いつまでも元気でいてほしい、介護体験をしてよかったと感じる学生が多くいます。

☆ある学生より～「はじめは来ることが嫌だったけれど、『気をつけて帰ってね。明日もまた来てね。』  
 と、最終日に認知症の利用者に言われた。もう会うことはないのにとすると涙が出た。」



#### 4. まとめ(考察)

##### (1)個人の尊厳の理解を深める。

介護現場では、利用者の尊厳を保ち、その人らしく生活できるように支援している。これは、教育の現場にも共通することである。高齢者のケアの場面を見学し接することで、人生の最期まで個人の尊厳は保たれるべきであることに気付かされる。

##### (2)相手を思いやる気持ち、人間理解を深める。

高齢になり、心身の機能が低下したり障害を持つ人との関わりは、思いやりの心や人間理解につながる。

##### (3)コミュニケーション技術を学ぶ。

高齢者施設は、介護が必要になった方が利用している。通常、初対面や人生の大先輩である高齢者とのコミュニケーションは難しい。心身に障害のある人や認知症の人と良好なコミュニケーションをとることは、更に難しさを痛感することとなる。高齢者施設の職員が、どのようにコミュニケーションをとっているのかを学び、良好なコミュニケーションをとるには何が必要かを考える機会となる。

##### (4)介護現場の職種間の連携から、チームワークの大切さを学ぶ。

介護現場は、他職種で協働しながら利用者の生活を支えている。多くの専門職が働く介護老人保健施設では、チームで利用者を支えチームワークは大切な要素である。組織にチームワークは必要不可欠である。

#### 最終日の、学生によるレクリエーションの実施の体験は、教育の場でも生かされる

高齢者施設の利用者は、身体状況・認知状況など一人ひとり異なり、これらをよく把握した上でレクリエーションを行う必要がある。これは、クラスという子ども達の集団において、一人ひとりの子の状態をよく把握して、全体でどのような授業を行う必要があるかを考えることにも通じる。

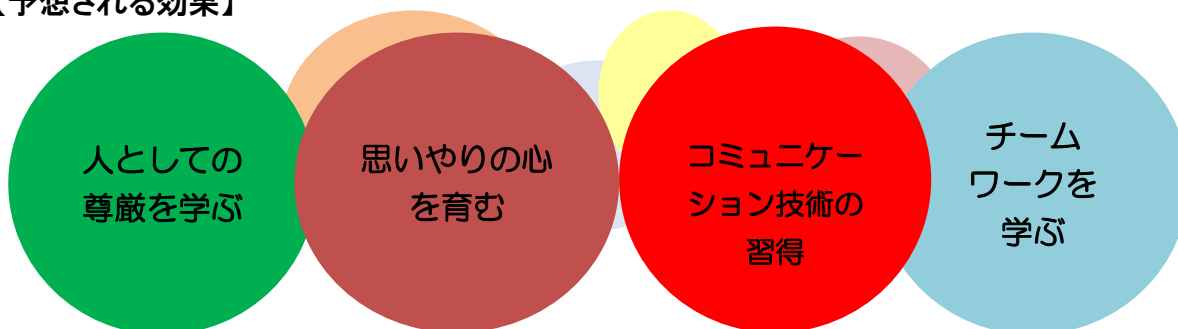
どのような内容が、利用者を楽しませることができるのかと考えること



どのような内容が、子ども達が楽しく学習効果の上がる授業を受けられるのかと考えることにつながる

#### 5. プログラムの提案

##### 【予想される効果】



介護等体験は、教員だけでなく、社会人に必要とされる基本的な人間力の学びの場

##### 【感じること】

あいさつができない学生が少数いる。教員となって子供たちに与える影響が心配。

# 認知症の方々の交流により、自分たちのできることを考えるプログラム実践

実践者：あったかホーム 加藤拓・小森真弓

## 1. 背景と目的

高齢者の約4人に1人が認知症の人又はその予備群となり、高齢化の進展に伴い、認知症の人はさらに増加 2012（平成24）年 462万人（約7人に1人）⇒ 2025（平成37）年 約700万人（約5人に1人）という推計がでている。


また、認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるような環境整備が必要な今、中学生と認知症の方々の交流を深めることにより、中学生が感じ、学び、考える。日常生活の様々な場所において配慮や活動が展開することを目的とする。

## 2. 本プログラムの目的

- (1) 現在の高齢社会について知る。
- (2) 認知症の方の思いや対応方法について学ぶ。
- (3) 高齢者施設等支援者がどのような思いをもって、仕事をしているか知る。
- (4) 実際に高齢者と接して、高齢者との出会いについて感じる。
- (5) 学んだことから、自分たちが何ができるのかを考える。

## 3. プログラムの概要(流れ)

内容	注意点等
導入	グループに分かれて座る。
1 あいさつ	
2 高齢社会と認知症についての講和	市の状況について、具体的な数値を用いて説明 認知症の方への対応方法についても具体的な内容を示して説明。また、実際に高齢者への対応方法も確認する。（にこやかに対応する。目線を合わせる。耳が遠い場合には近くで話す。同じ話をして初めてのように聞く。）
3 簡単高齢者体験	軍手をして、折り紙や筆箱の中を出したりしてみる
(休憩)	
4 車いすの操作の説明	車いす用自動車の到着に合わせ見学してもらう。スロープ等必要な機器についても試してもらう。

<p>5 簡単な車いす体験</p> <p>6 施設の高齢者との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介</li> <li>・校内を車いすを押したり、つきそって散歩</li> <li>・教室に戻り、交流。</li> </ul> <p>「好きな食べ物」「昔やっていた遊び・スポーツ」「恋話」「朝ごはん」「今一番楽しいもの」等お互いに話をしてみる。</p> <p>7 高齢者のお見送り</p> <p>8 振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・交流した方へのお礼の手紙を書く</li> <li>・今回①わかったこと②わからなかったこと③気づいたこと④もっと知りたかったこと⑤今後自分にできること、⑥その時に協力してもらいたい人を確認</li> </ul>	<p>2~4 人一組になり、車いす体験をする。</p> <p>高齢者の方々が来るときに丁寧に迎える。事前に学習した接し方に気を付けながら、積極的に話しかける。</p> <p>高齢者が話したがることを見つけ聞く姿勢(座る位置、相づち、うなずき)を保つ。あまりしゃべりたがらないことは深く聞かない。問をしたのち、話すまでゆっくり待つ。</p> <p>帰り支度にも協力する。最後まで丁寧に見送る姿勢を大切にする。</p> <p>交流してうまくいったことやそうではなかったことを出し合う。</p> <p>支援者はそれぞれの対応についてほめる。</p> 
--	---

#### 4. まとめ(考察)

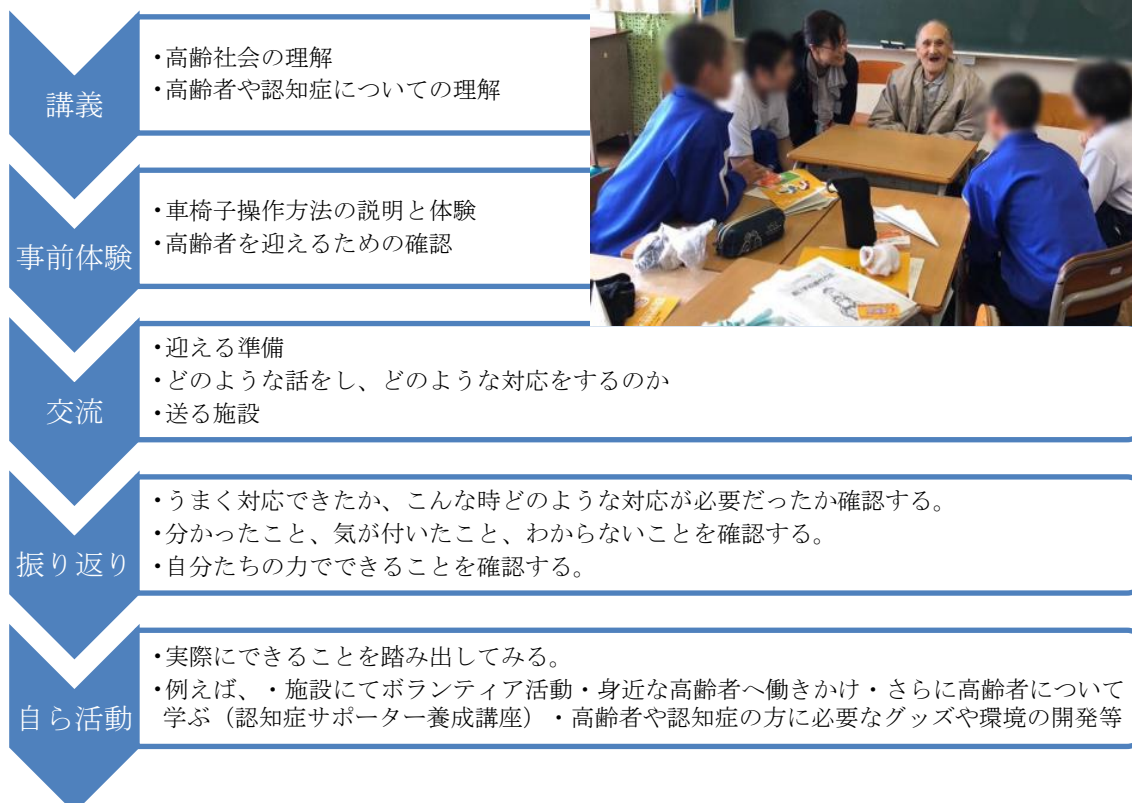
学びと交流をセットで行う本プログラムは、子ども達にとっては、戸惑いや難しさもあるが、子ども達が気構え過ぎずに自然な形で交流ができる。また、施設の職員の対応の姿勢や声かけの方法を実際に見ることで、自分たちもどのようにするのかを目前で学ぶことができる。高齢者への対応方法だけではなく、実際の送迎車両の操作やスロープ、車いす等も実際に使用している部分等の介護を支える機器についても見る事ができている。



今回の交流も高齢者とグループごとに行ったが、その中で、中学生に「親の言うことをちゃんと聞いていい子になるように」と何度も話する方、何度もあいさつをする方、うれしそうに中学生をほめる方、教室になかなか入れない方等日常では、直接話すことができない交流を行った。中学生たちもはじめは何を話したらいいのかかわかなかったようだが、こちらがちょっとしたヒントや少し質問を投げかけることにより、少しずつ場がほぐれていった。

施設としても、まずは、高齢者の安全の確保を行い、その中で高齢の方自身がその人らしく自分をだすことができ、交流することにより役割を意識できるような支援を行った。交流する高齢者にとっても、学校に訪問することは日常の生活の中では難しいが、交流する役割を持ちながら、参加することにより大きな刺激となる。また、中学生と接することにより、とても嬉しそうな表情をみることができたと考えている。

## 5. プログラムの提案



予想される効果	気を付ける点
<p>【子ども達】・座学や理論だけではなく、実際の対応方法について学ぶことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちでできることを展開できる。（施設にてボランティア活動を行う等）</li> </ul> <p>【施設側】・施設について理解してもらえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者について伝えることで職員自身も仕事を見直すことができる。</li> <li>・施設の行事として位置づけられる。</li> </ul> <p>【利用者】・子ども達と交流することにより元気になる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校は、バリアが多いため、高齢者の安全に配慮する。</li> <li>・交流する高齢者の希望や体調を個別に確認する。</li> <li>・対応する職員の思いや知識を意識的に伝え、仕事のイメージをもってもらおう。（特に中学生以上）</li> <li>・参加できる利用者が限られてしまう。</li> <li>・体調などにより、当日参加できない等もある。</li> </ul>





## 自分のまちを良くする仕組み共同募金運動を学びながら、 自分たちの役割を知るプログラム実践

実践者：埼玉県共同募金会鶴ヶ島市支会

### 1. 背景と目的

共同募金運動は、戦後、戦災孤児支援のため始まり、70周年を経過した現在も地域福祉推進の大きな財源として位置づけられている。平成8年以降は、社会的情勢もあり募金実績額は全国的に年々減少傾向にある。また、活動に対する認識も薄くなっていると感じる。

一方で、街頭募金・学校募金活動については協力団体、募金実績額ともに微増傾向にある。協力団体に対し本プログラムを実践することで共同募金について周知し、実践活動（街頭募金・学校募金）を通じて自分たちの役割を知ることが目的とする。

### 2. 本プログラムの目的

- (1) 共同募金の歴史や仕組みについて知る。
- (2) 共同募金を活用している地域福祉の活動について学ぶ。
- (3) 街頭募金・学校募金に参加することで募金の方法や場所について自分たちで考え実践する。
- (4) 学び実践したことから、自分たちに何ができるのかを考える。

### 3. プログラムの概要(流れ)

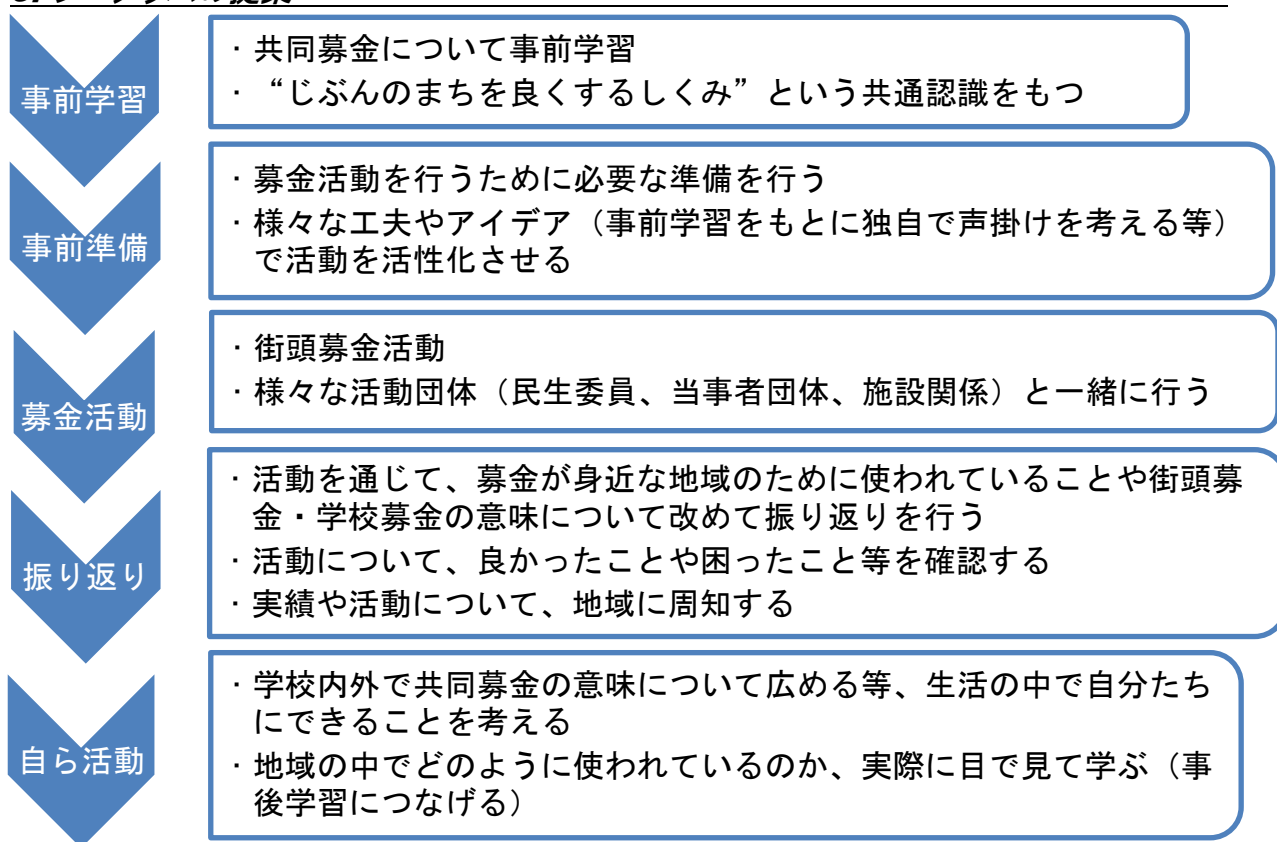
内 容
<b>【事前学習】</b>
1 共同募金の歴史
2 共同募金の仕組み
3 共同募金の使いみち
4 募金活動の準備
<b>【街頭募金・学校募金準備】</b>
1 実施場所の調整
2 募金グッズの準備
<b>【募金活動】</b>
1 街頭募金・学校募金活動
2 活動の振り返り



#### 4. まとめ(考察)

- ・赤い羽根募金については、その仕組みや用途等十分に周知しきれていない部分があるが、本プログラムを実施することで共同募金についての理解を深めたうえで活動につながる事ができていると感じる。
- ・学校側からは、担当職員（＝外部の講師）が入ることで、子どもたちも聞く姿勢になり、しっかりと学んでくれるとの声をいただいている。
- ・まずは共同募金を知ってもらうこと、興味を持ってもらうことを大切に、継続的な活動になるよう心掛ける。

#### 5. プログラムの提案



予想される効果	気を付ける点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・共同募金運動を含む募金活動についての意識付け</li> <li>・地域福祉活動への理解</li> <li>・“じぶんのまちを良くするしくみ”の“じぶん”には自分が含まれる。自らが活動者、協力者、受配者となり循環するしくみを作っている</li> <li>・事前学習、実践経験者として周囲への情報発信</li> <li>・学校と地域がつながるきっかけとなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単に募金を募るだけでなく、地域福祉のための募金であることを確認する</li> <li>・街頭募金活動については、事故等がないよう気を付ける。また、募金に対して強制感を出さないよう、通行人の妨げにならないよう注意する</li> <li>・共同募金“運動”を継続していくために、自分たちの活動の役割を次の世代に伝える</li> </ul>